

第3巻1号 2021年3月

秀明大学看護学部紀要

Journal of Faculty of Nursing

実践報告

看護基礎教育における遠隔実習の可能性に対する一考察

－リアリティのある遠隔実習を目指して－

中嶋 尚子・田村かおり・藤原佳代子・村越 望

 秀明大学看護学部

Shumei University Faculty of Nursing

 実践報告

 秀明大学看護学部紀要
 P.29-39 (2021)

 看護基礎教育における遠隔実習の可能性に対する一考察
 - リアリティのある遠隔実習を目指して -

 A study about Possibility of Remote Observation Practice for Undergraduate Nursing students
 - Aiming for Realistic Remote Clinical Practice -

 中嶋尚子¹⁾ 田村かおり¹⁾ 藤原佳代子¹⁾ 村越望¹⁾
 Naoko Nakajima Kaori Tamura Kayoko Fujiwara Nozomu Murakoshi

要 旨

2020年9月、COVID-19の影響で初年次の見学実習を遠隔で実施することになった。通常の実習の目的・目標を踏襲し、リアリティのある内容にするために、Google Classroomを用いて、実習施設に依頼した病院・病棟紹介動画に加え、感染対策を講じたうえで、教員自ら看護師、患者とその家族、他の医療職等の役柄を演じて作成した動画を配信し、カンファレンスを行い、レポートを課す等の方法で実施した。

その結果、多くの学生が「気遣い」という言葉をレポートに記述した。これは通常の実習で行われる看護師のシャドーイングでは見られなかった言葉である。学生は看護師の立ち位置だけではなく、看護師と患者間に注目して動画を視聴したと推察された。また、学生は動画の登場人物の立場に自分を置き換えたり、自分が目標や理想とする看護師について描いたり、個人的な経験を加味して意見を伝えたりするカンファレンスによって、徐々に動画にリアリティを感じるようになったと考えられた。

これらの結果から、通常の実習であっても臨地だけではなく、落ち着いて考えられる学内での動画の併用効果の可能性が示唆された。

キーワード：看護基礎教育 遠隔実習 リアリティ 見学実習 COVID-19

Key Words : undergraduate nursing education, remote clinical practice, reality, observation practice, COVID-19

I. 緒言

2019年12月に発生したCOVID-19は多くの国や地域で流行し、パンデミック状態となった。この感染症ではウイルスが唾液等に排泄され、感染経路は接触、空気、飛沫であり、会話、食事、身体接触や多くの人が密閉された室内で過ごすことで感染の危険が高まるため、人と人との関わりに制限を余儀なくされることになった。看護職は感染対策を十分に講じながら看護業務を遂行しているが、感染拡大防止の観点から、医

療施設の多くは外部の人々の出入りを制限しており、そのため、実習施設では臨地実習の受け入れを一時中止せざるを得ない状態になっている。日本看護系大学協議会による大学4年生の臨地実習に関する調査では、計画していた実習695科目のうち、予定通りに実施できたのはわずか13科目(1.9%)であり、515科目(74.1%)が臨地では実施できず、学内実習に変更していたという結果になっている¹⁾。

本学においては5月中旬から遠隔授業が開始となり、前期に行われる臨地実習を含めた全科目がその対象となった。そのため、基礎看護学実習I(以下、実習I)は9月下旬の4日間遠隔で実施することになった。実習担当教員(以下、教員)は、実習Iの目的・

 1) 秀明大学看護学部

1) Faculty of Nursing, Shumei University

目標や方法を踏襲し、できるだけリアリティのある内容にするために工夫して設計し実施することになった。本論はその実践報告である。

医中誌 Web において「遠隔実習」をキーワードに検索した結果は 1 件であり、「遠隔授業」をキーワードに検索した結果は 60 件であった（検索日：2020 年 12 月 8 日）。

これらの報告には、看護系大学以外にも医学部医学科で実施されたものもあった。報告例としては、COVID-19 対応はもとより、海外^{2) 3) 4)} や遠隔地の大学^{5) 6) 7)} と合同で実施する授業、不規則勤務の病院看護師を対象とした研修会⁸⁾ 等があった。その多くは試みの位置づけとなっており、遠隔授業のためのシステム開発とその運用、授業内容や画像の使い方等の紹介が行われ、履修学生等へのアンケート結果においても、それらの円滑さや授業内容の理解度、履修満足度が中心であった。また、遠隔実習に関しては、臨地での学びを保証する工夫として、DVD 教材の事例やシミュレーションを用いた学内実習、学内における実習指導者との意見交換、実習施設スタッフが実際の活動について語っている動画教材、ロールプレイやプロセスレコードを用いたコミュニケーションスキルに関すること等であった⁹⁾。それらは成人、在宅、精神看護学実習に関することであり、基礎看護学実習に関する記述はなかった。

その他の先行報告としては、2020 年 10 月 11 日に行われた日本私立看護系大学協会主催の講演会がある。その中に「遠隔での基礎看護学実習の実践」と題した講演があった¹⁰⁾。ここでの実習 I（科目名は本学と同じ）の内容には、実習病院が作成した病院や病棟の紹介動画、業者が制作した実習の心得と実際についての動画、日本看護協会の看護職の仕事紹介の Web 動画の配信、Web 会議システムを活用した衛生的な手洗いと個人防護用具の着脱の実施、それらの内容に即したテーマのカンファレンス、実習最後のレポート課題が含まれていたが、その実施結果についての報告はなかった。

これらの結果から、実習を遠隔で実施した看護系大学はあるが、その研究や報告は少なく、今回の報告は先駆的な位置づけになると思われる。その内容は、上述の先行研究や報告とは異なる方法を取り入れ、その実施結果を含めたものである。今回の結果は、今後も続くであろう COVID-19 やその他の感染症で類似し

た状況になった時の参考になると考える。

II. 本論の目的

実習 I の目的・目標や方法を踏襲し、できるだけリアリティのある内容にするために工夫して設計した遠隔実習の実施とその結果について報告する。

III. 用語の定義

通常の実習 I：過去に臨地で行われた実習 I

今回の実習 I：今回遠隔で行われた実習 I

IV. 倫理的配慮

本論文は授業設計についての報告であり、人を対象とする調査研究や介入研究ではないため倫理審査の対象にならない。しかしながら、今回の実習 I の実施結果を報告するにあたり、学生が提出した各種レポート、実習前後のアンケート、学生グループカンファレンスの内容が必要になるため、学生の了承が必要である。そこで、遠隔授業期間であること、学生が周囲に左右されない環境で個別に検討できるようにすること、容易に返信できることを考慮し、今回の実習 I の成績確定後、全履修学生に BCC メールを用いて、1) 実習報告として本学紀要への投稿を考えていること、2) 論文にレポート等の内容の一部を紹介する可能性があること、3) 2) の場合には個人名は公表されないこと、4) 協力に対し直接的なメリットはないが、論文が採用された場合は本学リポジトリで論文を閲覧できることや看護基礎教育に貢献できるかもしれないこと、5) 協力しなくても成績には全く関係ないこと、6) 返信があった場合には、個人名が明らかになっているレポート等の内容は除外することを説明し、協力できない（しない）場合は返信してほしいこと、8) 返信がないことで協力の意思確認をすること、9) 一度示した協力の意思は本論文が掲載されるまで変更可能であることを伝えた。初めて論文投稿に関わるであろう学生の状況に鑑み、同様の方法で 2 回意思確認を実施したが、協力できない（しない）との返信があった学生は皆無である。

V. 実習 I の概要¹¹⁾ および学生のレディネス

実習 I の目的は「医療施設内における様々な看護の実践活動を通して、看護の役割と機能および看護の対象を理解し、看護の場における日常生活援助やコミュニケーションについて学び、看護職を目指す者として

の基盤をつくる。」ことである。1年生が入学して初めて2か所に分かれて各病院を訪れ、病院の各部署や病棟看護師の業務を見学し、患者とのコミュニケーションを経て、病院の構造と機能、看護師の役割、患者の療養生活や日常生活援助の実際について学ぶ実習である。その他にも、学生、臨地実習指導者、教員による病棟ごとのグループカンファレンス、実習最終日の全体カンファレンスで情報共有や意見交換を行い、学びを深められるようにしている。また、看護職に相応しい身だしなみや臨地での言葉遣い、実習施設の看護スタッフや担当教員への報告・連絡・相談等の職業教育も含まれている。

通常この実習は前期授業の終了直後に実施されるため、学生のレディネスは前期で学んだ知識等を活用できる段階にある。例えば、「基礎看護学概論Ⅰ」では看護の定義や主要概念、看護の対象の理解等を、「総合教養演習Ⅰ」ではレポート作成、文献検索、プレゼンテーションやグループワークの実施方法等のアカデミックスキルを学んでいる。これらの内容は遠隔実習においても活用可能と考えた。

Ⅵ. 遠隔における実習Ⅰの設計

本学では遠隔授業を行う全科目に対し Google Classroom

(以下、GCR)を用いることになっていた。GCRは授業に関わる教員と履修生が参加でき、「ストリーム」という連絡ツールと「授業」という資料や課題等を配信し採点できる機能を有する。加えて Google Meet(以下、Meet)を設定すれば、GCRに招待したメンバー間でリモート会議が実施できる。これらのGCR機能を前提に設計した。

1. 今回の実習Ⅰの位置づけと内容

始めに今回の実習Ⅰの位置づけと取り上げる内容を考えた(表1)。通常の実習Ⅰの内容を考慮し、遠隔実習の強みを活かした内容にした。例えば、何回でも動画を視聴し十分な理解を促すことができたり、じっくりと考える時間を設定できたりする強みを活かし、通常の実習Ⅰでは実習前オリエンテーションで実施する「円滑な実習のための土台作り」を実習に組み入れ、通常の実習Ⅰ以上にそれらの内容と根拠の理解を深められるようにした。次に、これらの内容を構成するポイント考えた。まず、学生のレディネスを考慮し、通常の実習Ⅰで最初に行われていた院内内の各部署の紹介に先立って、病棟における看護師の役割や患者の療養生活を題材とし、そこから院内へと学生の視野を広げられるように取り上げる内容の順番を変更した。

表 1. 遠隔実習の位置づけと内容

位置づけとその理由	内容
(1) 円滑な実習のための土台作り ※今後の臨地実習においても看護職としての基本的な行動がとれるようにする。	①実習準備物品とその理由 ②看護スタッフや教員への報告・連絡・相談 ③健康管理 ④スタンダードプリコーション
(2) 今後の講義・演習のための土台作り ※通常の実習Ⅰにおいて、見学内容は各学生で異なるが、今回は学生全員同じ体験になるので、今後の講義や演習の場で共有できる。	①患者の療養生活と看護師の役割 ②患者(と看護師)を中心とした院内の部署連携
(3) 患者とのコミュニケーションを考える機会 ※通常の実習Ⅰでは患者とコミュニケーションをとる機会があるが、今回はできないので、学生が患者とのやり取りを想像しながらコミュニケーションを考える機会となるようにした。	①初めての患者とのコミュニケーションで考えられる場面への対応 ②動画場面から実際のセリフや動きを創作するシナリオ作成
(4) 既習アカデミックスキルの活用 ※学んだことはすぐに活かすことで、アカデミックスキルは専門職としても必要であることが理解できる。	①本日の学びのレポート作成 (そのうち、実習初日には教員が紹介した論文内容を加味する。) ②実習終了時レポート作成 ③実習グループカンファレンス (ひとりの教員が5人グループを2つ担当する。カンファレンスは2つのグループが交替で行い、ひとつのグループがカンファレンスの時はもうひとつのグループは傍聴する。)

また、遠隔実習には動画配信が欠かせないと考え、先行研究を検討した結果、動画は臨場感を出すために、すでに e-learning で用いられている¹²⁾ ことがわかった。この文献によれば、作成された動画は看護師と患者が対面でコミュニケーションをとっている場面を学生が視聴するものであり、学生がその場面の当事者にはなっていない。そこで今回は、学生が実際に見学しているという臨場感を出すために、学生が目線で視聴できるようにウェアラブルカメラで撮影した動画を中心に用いることにした。そして、遠隔であるがゆえに体験できない内容については、教員の経験を参考に、学生が遭遇しそうな場面を撮影したり、学生が受講している自宅等と動画の場を看護技術の実践で結びつけたりすることを計画した。

通常の実習 I では実習最終日に全体カンファレンスを実施しているため、実習施設の看護スタッフが出席し Zoom を用いての全体カンファレンスの実施も考えた。しかし、既習科目でアカデミックスキルを学んでも前期の全科目が遠隔で行われ、一度も登校していない学生にとって、外部の専門職を交え、大人数でカンファレンスを実施するにはレディネスが整っていないと考えられた。そこで、ひとりの教員に学生 5 人のグループを 2 グループずつ担当し、Meet を用いて教員とグループ学生でカンファレンスを実施することにした。その際、もうひとつのグループの学生にも同時に Meet に入ってもらい、他のグループのカンファレンスを傍聴することにした。カンファレンスは 2 つのグループで交互に実施し、順番による差を少なくすることにした。この方法により、カンファレンスの進め方や他のグループの学生の意見、教員の助言等について、自分のグループのカンファレンスに加えて学べるようになり、通常の実習 I にはない遠隔実習ならではの学び方を提供できると考えた。

2. リアリティのある実習にするための工夫

上述の内容から、1 日で取り上げるテーマ、GCR で配信する項目およびスケジュールを設定した (表 2)。その中からリアリティのある実習内容にするために工夫したことを中心に述べる。

事前に病院内の各部署の動画を 2 つの実習施設にお願いし撮影を依頼した。その際先方に通常の実習 I の内容である患者の療養生活や患者とのコミュニケーションが学べる動画撮影が可能かどうかについて確認したが、個人情報保護の観点から入院患者の様子を撮影

することは難しいということであった。そのため、学内で動画を撮影し、病棟の様子を再現すること、学生が自宅等で臨地実習の場で必要なことが実施できるように工夫した。教材となる動画撮影は、上述の遠隔実習の位置づけと内容および実習スケジュールにしたがって、患者および場面設定を行い、教員 4 名が各役割を決め、学内の実習室に病室を再現し、感染対策を講じながらアドリブで撮影した。

1) 実習 1 日目：看護学生としての適切な行動および実習準備

(1) 実習準備物品

実習に必要な物品を自宅からの持ち物と病棟への持ち物に分け、解説した動画を配信した。実習に必要な物品は学修に必要なもの以外に、個人情報保護、熱中症予防、身だしなみを整えることにも必要な物品があるため、各物品について準備する理由を解説しながら、学生が自分の目線で確認できるように実物を紹介した。

(2) 衛生的な手洗いおよび個人防護具 (以下、PPE) の着脱

まずスタンダードプリコーションについて解説し、続いて衛生的な手洗いの動画を配信し、学生はそれらを参考に自宅等で実際に実施した。次に援助時に使用する袖なしエプロン、マスク、未滅菌手袋の着脱動画を配信し、学生は同様に実施した。マスクや未滅菌手袋は学生が自宅等にある市販のものを用い、袖なしエプロンは 45 l のビニール袋と鋏で作製した動画を配信し、学生が作製して準備した。

(3) 身だしなみ

付け爪、つけまつげ、サンダル、アクセサリや腰パン等の不適切な身だしなみの学生が教員のチェックを受ける動画と不適切な身だしなみによって患者等が影響を受けた動画を配信し、学生は GCR の質問機能を用いて整えたほうがよい箇所を回答した。遠隔実習中も通常の実習 I と同様に、毎朝身だしなみを整え、教員が Meet で確認した。

(4) 健康管理

Google スプレッドシートで作成した健康管理チェック表 (以下、チェック表) を配信し、正しい体温測定方法とチェック表の専門用語について解説した動画

表2. 通常の実習 I と今回の実習 I のスケジュール・学修内容の比較

Classroom凡例 空欄：全体CR G：グループCR (CR：Classroom)

実習日	通常の実習 I		今回の実習 I	
	学修内容	テーマ	開始時刻(予定)と学修内容	Classroom
1日目	オリエンテーション 施設見学 病棟見学 療養生活環境の見学 カンファレンス	看護学生としての適切な行動 実習準備	9:00 開講・実習目標確認・本日の内容 課題と単位認定 9:30 グループ顔合わせ・自己紹介 10:00 実習要項に関する質問の回答 10:30 実習時の持ち物 11:30 身だしなみ 13:00 健康チェック表の説明と記入/体温測定 14:00 スタンダードプリコーション 15:00 カンファレンス 16:15 知識確認テスト(スタンダードプリコーションのみ) 身だしなみ論文紹介・本日の学びレポート作成	G&Meet G&Meet 自己学修
2日目	医療・看護活動場面の見学 (シャドーイング) カンファレンス	患者の療養生活と看護師の役割	8:30 健康管理チェック表の提出、身だしなみ整え、物品準備 8:50 健康状態、身だしなみ・準備物品確認 9:10 開講・本日の内容 9:15 実習開始病棟挨拶 9:45 模擬シャドーイング・PPE着脱 11:30 昼食休憩挨拶 13:00 昼食休憩後挨拶 13:20 患者の療養生活の1日 15:00 カンファレンス 16:15 実習終了病棟挨拶 本日の学びレポート作成	G&Meet G&Meet 自己学修
3日目	医療・看護活動場面の見学 (シャドーイング) 患者とのコミュニケーション体験 カンファレンス	患者とのコミュニケーション スタッフ・教員への報告・連絡・相談	8:30 健康管理チェック表の提出、身だしなみ整え、物品準備 8:50 健康状態、身だしなみ・準備物品確認 9:10 開講・本日の内容 9:15 実習開始病棟挨拶 9:45 スタッフ・教員への報告・連絡・相談 10:30 カンファレンス① 11:40 昼食休憩挨拶 13:00 昼食休憩後挨拶 13:20 患者とのコミュニケーション紹介編 13:30 患者とのコミュニケーション場面① 14:00 患者とのコミュニケーション場面②シナリオ作成 15:00 カンファレンス② 16:15 実習終了病棟挨拶 本日の学びレポート作成	G&Meet G&Meet 自己学修
4日目	医療・看護活動場面の見学 (シャドーイング) 患者とのコミュニケーション体験 カンファレンス	病院内・多職種連携	8:30 健康管理チェック表の提出、身だしなみ整え、物品準備 8:50 健康状態、身だしなみ・準備物品確認 9:10 開講・本日の内容 9:40 A病院紹介 10:40 シャドーイングと患者の入院生活の1日の振り返り 患者を巡る多職種連携の様子 11:10 B医療センター紹介 13:30 前半カンファレンス 14:40 最終カンファレンス準備 15:10 最終カンファレンス 16:15 実習終了病棟挨拶 本日の学びレポート作成 最終レポート作成ガイダンス	G&Meet G&Meet G&Meet 自己学修
5日目	実習のまとめ・発表・討議			

を配信した。その後通常の実習 I と同様に、教員は毎朝 GCR に提出されたチェック表を確認し、さらに健康状態を Meet で確認した。

(5) 病棟挨拶と衛生的手洗い

通常の実習 I で行われる病棟スタッフへの挨拶を実習開始時、昼食休憩前後、実習終了時の 1 日 4 回実施

することにした (図 1)。様々なシチュエーションの動画を作成し、学生は挨拶するスタッフとセリフを GCR に回答した。その回答終了後、学生は自宅等で衛生的手洗いを実施し、臨地実習の場にいることを常に意識したり、既習技術を繰り返し実施したりできるようにした。



図 1. 病棟スタッフへの挨拶場面

2) 実習 2 日目：患者の療養生活と看護師の役割

(1) 患者の療養生活と看護師の役割

通常の実習 I では、学生が看護師について業務を見学するシャドーイングが行われる。今回は模擬シャドーイングと題して、学内の実習室に 4 人部屋を設定し (図 2)、心臓カテーテル実施直後のモデル人形患者 (以下、患者 A)、これから手術室に入室するモデル人形患者 (以下、患者 B)、左大腿骨転子部骨折の模擬患者 (以下、患者 C)、糖尿病の教育入院の模擬患者 (以下、患者 D) を設定した。撮影会場のレイアウトやいずれの患者設定も、教員全員が撮影会場に集まってから話し合い、アイデアを出し合いながら設定した。各教員の演技は、基本的に患者役のアドリブに看護師

役が合わせて対応し、患者 A と B の場合は看護師役がアドリブで看護する形で撮影が行われた。実習開始の担当患者紹介から午後の検査とりハビリテーションまでの業務を行うひとりの看護師役をシャドーイングの学生役がウェアラブルカメラで撮影し、動画を視聴する学生の視線がそのまま撮影されるようにした (図 3)。

また、患者の清拭では看護師が学生に PPE の着脱を指示する場面を撮影し、動画を一時停止したうえで学生全員が自宅等で PPE の着脱をするまで待つて動画を再開した。学生は PPE 装着後そのままの状態動画を視聴し、臨地で清拭の場に立ち合った状態になるようにした。



図 2. 学内実習室を多床室に設定



図 3. ウェラブルカメラによる撮影

3) 実習3日目：患者とのコミュニケーション／看護スタッフや教員への報告・連絡・相談

(1) シャドーイング中の看護師不在時の出来事

教員のこれまでの経験から、シャドーイング中の看護師不在時に起こった2つの場面（学生が治療上ギャッチアップできない患者に「食事をするのでベッドを上げてほしい。」と頼まれた場面、学生が端座位の患者に「理学療法士が迎えに来るので車椅子に乗せてほしい。」と頼まれた場面）を撮影した動画を配信し、学生は各場面でするであろう行動とその理由を考えてGCRの質問に回答した。学生には実習要項¹¹⁾を熟読するという事前課題があり、その「ヒヤリハット・インシデント・アクシデント」項目の内容も考慮しながら、この2つの場面に関するインシデントの報告と対応についてGCRを用いて解説を加えた。

(2) 患者との初めてのコミュニケーション場面

教員のこれまでの経験から、学生が初めて患者とコミュニケーションをとる2つの場面を設定した。まず看護師役が患者役に了解を取る場面を撮影した動画で学生に患者の状態の情報を提供した。その後看護師役が学生を連れて紹介する動画を配信した。2つの場面は、白血病再発で化学療法を受けている患者が自分の深刻な病状を思わず吐露する場面と学生が自己紹介後沈黙となる場面とした。前者は、この動画の学生であったら、この場面でする行動と理由をGCRの質問に回答し、後者はセリフや動きを創作するシナリオを作成し、この場面のその後を明らかにする課題とした。

4) 実習4日目：病院内・多職種連携

(1) 病棟内での多職種連携の様子

まず、通常の実習Iの2か所の実習施設が撮影した院内の各部署、病棟の紹介動画を配信した。この時に患者の療養生活と看護師の役割で使用した患者の入院生活の1日および模擬シャドーイングの視聴時間を短縮した動画をダイジェスト版（以下、ダイジェスト版）として配信した。また、模擬シャドーイングで登場した患者Dの食事に関する問題を、主治医、病棟担当薬剤師、患者担当看護師、栄養士がスタッフステーションでミニカンファレンス（以下、MCF）を実施している動画も配信した。

Ⅶ. 実施結果

履修学生はCOVID-19の影響で、入学してから一

度も登校したことがなく、教員とも友人ともほぼ話したことはなく、一度も面識がない人もいるような状態であった。その状況で初めての実習が遠隔になった点を考慮し、実習前後に自由記載のアンケートを実施した。また、日々の学びのレポート、実習終了時レポート、実習グループカンファレンスの内容についての記述や発言内容について示す。

1. 実習前後のアンケート結果

履修学生は44名、対象とした自由記載の回答率は実習前が93%（任意ではあったが課題の位置づけでもあったため）、実習後が68%であった。自由記載の分析方法は、筆頭著者が各文章を読み頻繁に出てくるキーワードを中心に分類した表を作成し、自由記載の内容とその分類を他の担当教員が確認する方法で妥当性を確保した。

実習前にはこの実習への期待や疑問を質問した。なお、以下に示す結果の二重鍵括弧はキーワード、鍵括弧はキーワードともに記載されていたアンケート内容である。もっとも多かった回答は『不安』であり12人であった。たとえば、「初めての実習が遠隔で不安です。」「遠隔実習とはどのように実施するのか想像が付きません。」であった。その反面『楽しみ』という回答もあった。たとえば、「座学ではできない身体に感じる実習」「看護に関心がある自分としては看護技術ができることを楽しみにしている。」であった。

実習終了後、実習でもっとも印象に残ったことについて尋ねると、「シャドーイング/教員の演技」が回答者の40%、「患者とのコミュニケーション」20%、「自宅等で技術を実践したこと」17%、「病院・病棟案内」14%であった。実習の感想では、回答者全体の53%の学生が「遠隔でもしっかりと学ぶことができた。」と回答していた。その理由は「本来の実習と同様の方法だった。」「学生目線での動画だった。」「教員の演技による再現」「実際に病院に行っているような感覚」「オンラインでも実際に（病棟スタッフへの）挨拶や技術が体験できたこと」「じっくり考える時間があつたし、他の学年の生徒よりイメージし予測することが多かったので、実際に臨床現場に立った時に落ち着いて実習できると思う。」であった。

2. 日々の学びのレポート

このレポートでは、その日の学びからひとつを選んで具体的に記述・考察し、結論を導くことを課題とし

た。4日間の各実習日において、動画の内容が書かれている文章を抜粋し、そのキーワードの使用数と内容を検討した。

実習初日は主に身だしなみ、スタンダードプリコーション、健康管理を取り上げた。上述のように、具体的に各方法を紹介し、学生には自宅等で実際に実施するようにしたが、動画の内容を記述していた学生は3人であり、衛生的な手洗いとPPEが1人、身だしなみが2人であった。前者は「身につきやすく正しい方法を身につけることができた。」であり、後者は不適切な身だしなみの学生を見て、「患者の立場に立つと、安心感や信頼という感情をもつことができなかった。」「全体的にだらしく、不清潔であると感じた。」とあった。

実習2日目は患者の療養生活と看護師の役割を取り上げた。動画は模擬シャドーイングと患者の入院生活の1日であった。動画の内容を記述していた学生は24人であり、多かったキーワードは『気遣い』『臨機応変』『観察力』『判断力』『患者の全体を見る力』『コミュニケーション能力』『架け橋』であった。数としては少なかったが、興味深いキーワードに『看護師の存在意義』があった。

実習3日目は患者とのコミュニケーションと看護スタッフや教員への報告・連絡・相談を取り上げた。動画の内容を記述していた学生は18人であり、前者の記述は5人、後者の記述は12人、その他が1人であった。後者の記述はインシデントを兼ねており、その動画を視聴してこの場面でどうするかと問われた時、「報告までは思いつかなかった。」「自分がその場にいたら、患者の意思を尊重して動画の学生のようにやってしまうかもしれない。」と記述していた。

実習最終日は病院内・多職種連携を取り上げた。動画の内容を記述していた学生は24人であり、患者Dについて15人、実習施設撮影動画は4人、ダイジェスト版については1人であった。患者Dについては、MCFに関連して想起していた学生が多く、「多職種連携の様子がよく分かった。」という記述が多かった。

3. 実習終了時レポート

このレポートでは、一連の実習での学びからひとつを選んで具体的に記述・考察し、結論を導くことを課題とした。

「遠隔実習にはなったが、臨地実習では難しい、時間をかけて考察するという行為が可能になった。」と

いうメリットについて書いている学生がおり、その言葉に象徴されるように、日々の学びを改めて考えた中で印象に残ったことを自分の言葉で表現している学生が多かった。例えば、「衛生的な手洗いやPPEの着脱、身だしなみは、看護師であれば当たり前を実施することではあるが、その当たり前を当たり前に行うことが必要である。」「相手（患者）のわずかな違いを見抜くためには、日頃の相手の状態や性格などを知っていなければそのしぐさや行動が何かの兆候なのか、普段からの振る舞いなのか、判別できないといけない。」「小さな違和感からケアの改善につながっていく。」「ただ報連相（報告・連絡・相談）をするのではなく、報連相をする人の思いやりの心がより良い人間性に導いてくれるのである。」「看護師のやるべきことをただ成し遂げるのではなく、自ら患者のことを知り、常に観察することではないかと考える。」等であった。このような記述から、学生は動画における看護師と患者のかかわりから看護師の行為の意味を考え、看護師の役割や必要なことを記述していた。

また、動画における看護師と患者のやりとりから、動画のような患者に対する対応の方法を学んだという学生も多かった。例えば、「『脚を（ベッドから仰臥位のまま）下ろしていた体勢の方が楽だ。』という患者に対して、危ないからとその体勢を無理にやめさせるのではない。危ないけれど楽ならばそのままの体勢にして、落ちないように注意喚起することはその患者に合わせた看護と言えるだろう。」「今回の実習では血糖値が高い患者がこっそりチョコレートを食べいて、それを看護師が発見するという場面があり、（略）看護師はきつい言い方はしないでやさしく注意をし多職種に報告をしていた。」等であった。

4. 実習グループ学生カンファレンス

このカンファレンスでは、グループの学生にカンファレンス中の通信障害が予測されたため、その学生が再視聴できるように、学生には事前にMeetを録画する承諾を得て録画した。しかし、録画の失念があったため、分析の一部には担当教員のカンファレンスメモを活用した。各担当教員には担当学生グループのカンファレンス内容について、配信した動画に関する発言を中心に文字化して表にまとめてもらい、筆頭著者がそれらの結果の関連を分析し、その結果を各担当教員に説明し同意を得る形で妥当性を確保した。

このカンファレンスでは、「他の学生の意見や考え

を聴ける場であり、1人で学ぶ遠隔実習にあって、唯一同じ立場の学生と話ができて安心できる場である。」と発言したり、レポートに記述したりしている学生が多かった。実習当初はその日の実習テーマに沿って進めることが多かったが、徐々に関心のあることを質問したり、自分が疑問に思っていることを他の学生に訊いてみたりするような自発的な展開になった。

それらの発言で多かったのは、動画の登場人物(特に看護師や学生)を自分に置き換えたり、自分の経験を関連させて考えたり、自分が理想とする、あるいは目標とする看護師像に関することやそれを目指すための方法についてだった。例えば、「身だしなみや衛生面を当たり前きちんとすることが大事。動画でもあったように、看護師は命を扱う仕事だから、決められたことを自分がしっかりできていないと、患者さんに責任が取れないと思った。」「報告・連絡・相談のことが印象に残っていて、伝え方について日々の生活から考えていきたいと思った。」「小さい時に入院したが、不安だった時に看護師がずっと手を握ってくれていたことが印象的で、安心したことがあった。私もそのような看護師になりたい。」「きちんと看護師とコミュニケーションできなければ患者の安全は守れない。これから実習に行くときにはしっかりそれを頭に入れて、何かあった時にはできるようにしていきたい。」「実習生にこの人はこういう症状があって、この人は9時から手術があるんだよとか、この人は今ちょっと弱ってて、元気がないんだよとか表情だけではなく、体調とかも知っていて、具体的なことを前もって知っておくことが大事だと思った。」等であった。

VIII. 考察

今回の実習での学生の学びは多岐にわたっているが、考察では2つの点を取りあげ、今後の実習への示唆を得たいと考えている。1点目は、通常の実習Iとは異なる立ち位置での学び、2点目は動画にリアリティを感じたと考えられる要因である。

1. 通常の実習Iとは異なる立ち位置での学び

今回の実習では多くの学生が動画の看護師の行為に対し「気遣い」という言葉を用いていた。「気遣い」はケアリングの訳語であり¹³⁾、ケアリングの倫理は人間関係と責任に着目したもの¹⁴⁾である。模擬シャドーイング動画では通常の実習Iのように、看護師に付いて見学する学生の目線で撮影したが、動画を視聴

した学生は、看護師と患者の間を立ち位置として視聴していたことが推察された。そうでなければ、人間関係のネットワークの中のかかけがない一人の人間¹⁴⁾としてのかかわり、すなわち「気遣い」を見出すことはできない。学生がそのような立ち位置で動画を視聴した理由として以下のことが考えられる。

まず、通常の実習Iでは3日間看護師に付いてシャドーイングを実施するため、学生は多くの時間を看護師の立ち位置で見学し、看護師の解説を聴くことになる。そのため、患者の視点で見学することは、たとえ教員が助言したとしても、現実には看護師と行動を共にしているので、学生がかなり意識していないと難しいことが推察される。これは、通常の実習Iでは見学することが難しい患者の立ち位置で撮影された動画を模擬シャドーイング動画と同じ日に視聴したことにより、患者の立ち位置も考慮し、看護師と患者の双方の立ち位置を自由に行き来することになったと考えられる。

次に、通常の実習Iではシャドーイング担当看護師からの情報以外にも様々な情報が学生に与えられ、学生にとっては初めての実習Iの緊張感の中でそれらの情報を熟考する余裕がもてないことが考えられる。加えて、緒言で述べたように、多くの先行報告では、遠隔授業のシステム開発や運用の円滑さ、画像等の使い方に伴う授業内容の理解度、履修満足度が中心となっていたが、今回の実習Iでは、すでに前期授業において同様のシステムを用いていることもあり、学生はシステムの活用に関する通信障害、遠隔授業に伴う身体等への影響が容易に予測できる状況にあったことが、実習前アンケート結果からも明らかになっている。それが自宅等にしながら提供された情報を落ち着いて熟考できたことにつながっていると考えられる。

以上のことがベースとなり、学生がウェアラブルカメラで撮影した映像等の善し悪しにとらわれることなく実習に集中でき、映像の看護師の行為の意味、その行為の患者にとっての意味も併せて熟考するに至ったと考えられる。

2. 動画にリアリティを感じたと考えられる要因

リアリティは本論の重要なテーマである。今回教員自ら俳優となって動画を作成しようと考えた理由のひとつは、遠隔であっても学生にリアリティのある実習内容を提供にしたいと考えたことからだ。これは多くの先行研究や報告に動画が用いられていることか

らもわかるように、現実を映した動画はリアリティがあるという前提があるからである。つまり、作成者側も視聴者側も現実という共通理解があるからこそリアリティの共有が可能なのである。しかし、今回の実習で使用した動画は臨地経験がある教員の経験を土台として作成されたとしても、リアリティを感じているのは作成した教員側だけで、学生にとっては虚構なのである。

おそらく教員がリアリティを感じた動画を配信しただけでは今回の結果のようにはならなかったであろう。上述の学びの経過を辿ると、実習当初は身だしなみが整っていない学生役を「だらしがない。」というように、動画の登場人物を客観的に批判したり、模擬シャドーイングの看護師の行為を「気遣い」というように、褒めるような評価的な印象のある言葉を用いたりしていた。その後徐々に動画の登場人物の立場に自分を置き換えて考えるようになった。特に患者とのコミュニケーション、看護スタッフや教員への報告・連絡・相談の動画がそのきっかけになったと思われる。そしてカンファレンスでは、動画をきっかけに個人的な経験を発言し合ったり、自分が理想や目標とする看護師像を語り合ったりしている学生が見られるようになった。

このような経過を経て、学生にとって虚構だった動画がリアリティへと変化していったと考える。虚構とリアルとの関係やなぜ「虚構」を「リアル」と感じるのか、そもそも「リアル」とは何かという問題があるが、それを哲学の問題としつつも現代に即した端的で示唆的な東¹⁵⁾16)の「想像力の環境」という考察がある。その環境にあっては社会の構成員がひとつの「現実」を想像的に共有するように調整される。それは「虚構」であってもその世界の構成員がその「虚構」を想像的に共有すればひとつの「現実」になるとも言えるのである。

東はその共有の条件にコミュニケーションがあると述べている。当初、動画の現実を想像的に共有していたのは教員だけであったが、学生が想像できるような発問を提供し、カンファレンスという学生同士がコミュニケーションをとる機会を設けた結果、動画という「虚構」を想像的に共有し、動画は学生にとってリアルになったと考えられる。

IX. おわりに

今回の実習では、学生は通常の実習 I とは異なる立

ち位置に立ったり、学生同士が想像力を共有したりすることで、通常の実習 I と同等の学びが可能になったと考えている。実習 I を遠隔で実施することになった時、多くの教員は臨地で実施できないことに不十分さを感じていたに違いない。今回の結果は遠隔実習の可能性や一概に臨地で学ぶことだけが、学生にとって最善の学びの環境とは限らないことを示唆している。今後も実習 I が通常にも遠隔にもどちらにもなる可能性がある。どちらかの方法という考えではなく、学生にとって最善の学びになるようにあらゆる方法を検討したり組み合わせたりすることが重要である。

謝辞

本報告に際しご協力いただきました履修生の皆様、動画撮影等でご協力いただきました実習施設の東京女子医科大学八千代医療センター、医療法人社団碩成会島田台総合病院の皆様に深く感謝申し上げます。

利益相反

本報告における開示すべき COI はない。

引用文献

- 1) 一般社団法人日本看護系大学協議会高等教育行政対策委員会(2020.10.19): 2020年度看護系大学4年生の臨地実習科目(必修)の実施状況調査結果報告書
(<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/09/202009koutoukyouiku-houkokusyo.pdf>) .
- 2) 宮越幸代, 太田克矢, 森下孟: 2010年度に配信した遠隔授業「国際看護学」の実践報告－授業システムの運用と授業運営に対する考察－, 長野県看護大学紀要, 14,99-111,2012.
- 3) 辻村弘美, 森淑江, 宮越幸代: 途上国における看護職者養成支援のための遠隔教育－スリランカにおける Skype を用いた体位交換技術の評価－, Kitakanto Med J,64,57-66,2014.
- 4) 森兼眞理: 遠隔授業による国際看護・国際保健教育への試み－ JICA カンボジア保健プロジェクトの協力を得て－, 奈良看護紀要, 11,92-96,2015.
- 5) 山本利江, 和住淑子, 青木好美, 他: SCS 車載局を利用した遠隔双方向授業の企画・実施報告, 千葉大学看護学部紀要, 26,69-74,2004.
- 6) 岡野泰子, 市川靖史, 遠藤格: 多様なニーズに対

- 応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)」養成プラン横浜市立大学の展望 多職種教育を可能にするがん専門教育のための方策, 横浜医学, 68(4), 563-567, 2017.
- 7) 中村喜美子, 辻川真弓, 上條史絵, 他: 三重大学・鈴鹿医療科学大学合同慢性疼痛医療者育成プログラム: 2018年度の取り組みについて, 日本運動器疼痛学会誌, 11, 278-284, 2019.
- 8) 岡本恵理, 白石葉子, 佐藤智子, 他: 臨床看護師を対象としたフィジカルアセスメント教育方法の検討, 三重県立看護大学紀要, 17, 17-26, 2013.
- 9) 高口みさき, 福岡公香, 吉江麻里: 新型コロナウイルス感染症に対する愛知県の現状と養成所5校の工夫, 看護教育, 61(8), 700-708, 2020.
- 10) 日本私立看護系大学協会(2020.10.21): 研修会・セミナー シミュレーション教育に関する研修会—コロナ禍におけるシミュレーションを用いた遠隔教育—, 山住康恵, 遠隔実習実践報告 遠隔での基礎看護学実習の実践. <<https://drive.google.com/file/d/1m38BqaSgGRhsPr-HHlsbH5PLcn5Betm1/view>> .
- 11) 秀明大学看護学部: 秀明大学看護学部実習要項 2020年度, 秀明大学, 千葉県八千代市, 30-32, 2020.
- 12) 青柳寿弥, 竹内登美子: 「認知症高齢者とのコミュニケーション法」のe-Learning教材の開発, 日本看護研究学会雑誌, 40(2), 151-161, 2017.
- 13) Benner P., Wrubel J.: The Primacy of Caring Stress and Coping in Health and Illness, 1989, 難波卓志, ベナー/ルーベル 現象学的人間論と看護 第1版, 455-457, 1999.
- 14) Davis A.J., 太田勝正: コンサイス看護論 看護とは何か—看護の原点と看護倫理, 照林社, 東京, 112, 1999.
- 15) 東浩紀: 動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会, 講談社, 東京, 40-47, 2001.
- 16) 東浩紀: ゲーム的リアリズムの誕生—動物化するポストモダン2, 講談社, 東京, 60-66, 2007.

